

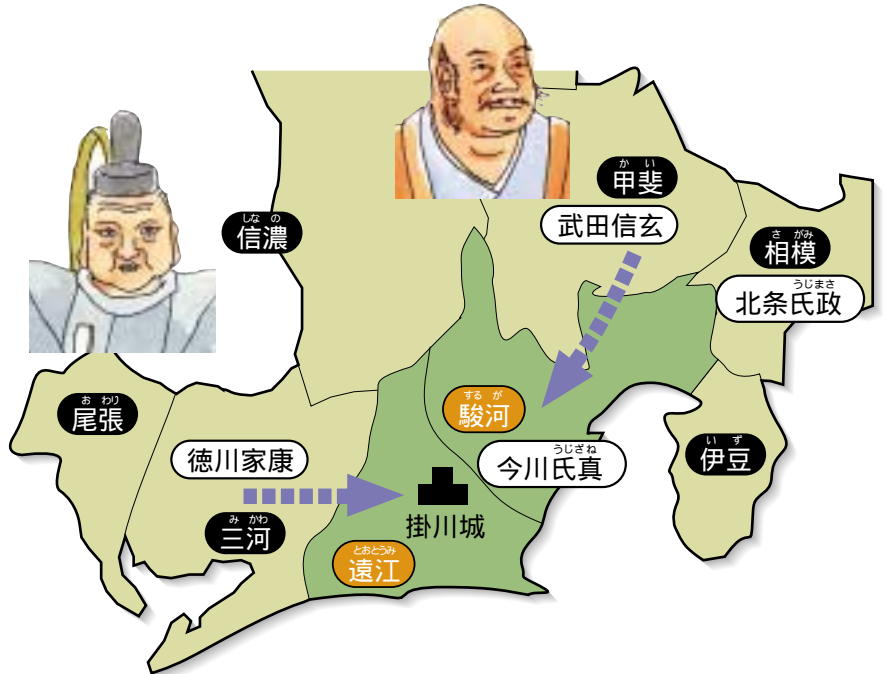
いつの時代も、天下を支配する将軍との関わりが深かった掛川

山内一豊までの掛川の武将たち — ④

信玄と家康が 駿河・遠江を攻める

永禄3年(1560)桶狭間で織田信長に義元を討たれた今川家は、息子の氏真が跡を継ぎます。その8年後、今川家を徳川軍と武田軍が攻撃します。大井川を挟んで、信玄が駿河を、家康が遠江を領有するという密約を結び、それぞれが兵を進めます。武田信玄に駿河を攻められた氏真は、追われて重臣の朝比奈氏が守る掛川城へ逃げ込みます。信玄は、家康との密約を破り信州から南下し、遠江見付に進入、さらに家康旗下の久野城を攻めたてます。こうして、徳川・武田の抗争が表面化し、家康は遠江の拠点を確認すべく、掛川城の攻略を早めます。

1568年、家康と信玄が同盟する



1568年12月20日からの攻防

永禄11年(1568年)12月20日 家康が掛川城を攻める

家康は、掛川城周辺に陣場峠(青田山砦)・杉谷城・笠町砦などをつくり、立てこもる今川氏真と朝比奈泰朝軍を包囲します。激しい攻防が行われ、有名な今川方の武士が鉄砲で撃たれ死んだという記録もあります。この戦いには、高天神城の小笠原氏清軍も加わり、家康軍の先鋒として活躍します。

6か月の攻防の後、徳川・今川の講和が成立し、掛川城を開城した氏真は、掛塚湊(旧竜洋町)から小田原の北条方へ行き、家康はこの地域の軍事拠点である掛川城の城主に、重臣の石川家成を任命します。家康は、山内一豊が城主になるまでの22年間、掛川を支配します。

元龜2年(1571)再び信玄は遠江侵略を開始し、頻りに攻撃を行います。この地域の武田と徳川の戦いは、天正9年(1581)の高天神城の落城まで続きました。



龍尾神社
家康が掛川城を攻めたとき、本陣にしたとされる神社。掛川城の守護神とされ、その後の城主山内一豊との関わりも深く、二代目忠義が寄贈したとされるソテツや、古文書が保存されています。

陣馬峠から市街地を望む